

高知大学農学部 受田 浩之

1994年6月8日から11日までトレド（スペイン）で開催された標記国際会議に出席した。本会議の学術的内容の報告については他の先生にお任せすることとして、日本からの参加者の内で、たまたまこの世に生を受けてからの年月が最も短かったという“未熟者”としての立場から、参加に至った経緯とその印象を述べさせて頂く。本拙稿がこれまでに国際会議での発表を躊躇しておられた、特に若手研究者の方々の心を動かすことができれば幸いである。

今回の学会に参加することを決心したのは、その約1年半前に開かれた第17回フローインジェクション分析講演会（東京都立大）の懇親会の時であったと記憶している（1992年12月）。個人的に開催地のスペインに対して大きな憧憬の念を抱いていたのが、動機のすべてであったように思える。というのも、以前に1年間欧州に滞在しておきながら、スペインに足を踏み入れていなかったことを当時強く後悔していたからである。従って、他の先生方とは違い、私の場合は参加することを決心した後に、何を発表しようかと悩み始めたのである。次にスペインまでの旅費をどう工面するかという大きな課題に突き当たるのであるが、これについては各種財団への国際学会参加費用の補助申請に応募する方法から、個人的な蓄えを叩いて行く方法まで、いくつもの選択肢を念頭に置きながら直前まで考慮した。そうこうするうちに、学会登録の時期を迎えた（1993年8月）。この間に発表内容についてはほぼ煮詰まり、タイトルまで決定した。次の決断は要旨の発送（1994年1月）の際に指定する発表形式の選択である。これには随分と悩んだ。それまでに2度国際集会でポスター発表を経験しており、いつかは口頭発表をしてみたいと誘う自分と、「お前の英語じゃ（短時間で人に理解して貰うのは）無理だ」とポスターを強要する自分。しかし結果的に、口頭発表に軍配は揚がった。

学会が間近に近づき色々慌ただしくなってくる。今回は旅のすべてを酒井忠雄先生（愛知工業大）にアレンジして頂いたお陰で、直前は発表の準備とプロシーディングの作成に集中することができた。ただしあまりにも発表のことばかりを考え過ぎたため、スペイン語を全く勉強せずに出かけてしまったことは悔いの残るところであった。

日本から参加された先生方と成田空港でお会いして、いざ機上の人となる。それからトレドの学会会場Hotel Beatrizに到着するまでは、しばし時間が経つのも忘れ、スペインワインを堪能した。その日の夜はパーティーが開かれ、次の日の朝からいよいよ学会が開催される。自分の発表はいつかとプログラムに目を走らせたとたん思わず青ざめた。なんと自分の発表はその初日の午前中、10時10分からとなっている。もちろん日本からの参加者としてトップバッターであった。そのことが自分の中で大きなプレッシャーとなり徐々に緊張感を味わうことができた。

いよいよ当日。なんと発表者用のマイクがない。皆、肉声で喋っている。多少不安を感じたが、このときばかりは日頃カラオケで鍛えた喉が役に立ち、なんとか会場全体に行き渡る声で発表できた。今回発表した内容は複雑な数式を含んでいたため、あまり口頭発表には馴染めなかった感もしたが、発表終了後何人かの研究者とその内容についての議論をすることができたことから、ある程度は自分の英語も理解して貰えたのだと胸を撫で下ろした。

ここまでが参加を決意してから、発表が終わるまでの経緯である。今回、私は口頭発表を選んだわけであるが、口頭発表では多くの聴衆が自分の話すことに一斉に耳を傾けてくれる、つまり多くの人に（聞く意志を持たない人まで）同時に自分の研究内容をアピールできる点が長所である。一方、ポスター発表では興味を抱いてくれた特定の研究者と時間的な制約を考えずに討論することができる。但し、多くのポスターの中から自分の研究に目を向けて貰うように、目立つポスターのレイアウトを考案することも必要であると強く感じた。どちらもその長所短所を十分に吟味して、より多くの研究者とディスカッションできるように選択すべきであろう。

海外で開催される国際会議に出席すれば、当然その国の文化に触れることができ、見る物、食べる物すべてに大きな感動を味わうことができる。特に発表が終わってからは、まさに一介の観光客と化すことも可能である。もう一つ述べておかなければならないことは、日本から参加された多くの先生方とこの旅の間ゆっくりと話をさせて頂いたことである。通常日本では多忙な先生方も、海外ではゆったりとした時間の流れに身を任せることができるようである。個人的にはこのことも、海外での国際会議出席の大きな収穫であると考えている。

以上のように私にとって海外での国際会議出席は、研究生活における一服の清涼剤であり、明日へのカンフル剤的役割を持っている。最近本屋で“ブラジル”の観光案内書を立ち読みする機会の多くなった今日この頃である。